

驚田清一さんは『わかりやすさの落とし穴』というコラムのなかで、「分からないものを分からないままにあれこれと吟味するしぶとい知性も必要ではないか」と指摘しておられます。こと人の命や人生について、「白か黒か」のわかりやすい判定を性急に求めていくことには、問題の本質を見失わせたり、歪めたりしてしまう「落とし穴」があると考えからず。

聖書は、イエスを救い主であると語り伝えます。しかしそれは、当時の人々にとって、決して「わかりやすいこと」ではありませんでした。洗礼者ヨハネは、イエスのことを「世の罪を取り除く神の小羊」（29節）と指し示しましたが、この「取り除く（アイロー）」というギリシャ語は、後に人々が「殺せ。殺せ。十字架につけろ」（19:15）とイエスを擲擧する時の「殺せ（アイロー）」と同じ言葉が使われています。イエスは罪を取り除くために来られたのに、逆にそのイエスを取り除こうとする人々の無理解が示されています。イエスの言動を、自分達の好・不都合によって、あるいは従来の枠組みのなかで判定した時に、イエスは「取り除く」対象としてその目に映ったのです。聖書に記されたイエスの言動の意味合いや価値について、わかりやすい判定を性急に求め過ぎてしまうことには、そこに秘められた救いの奥義を見落としてしまう「落とし穴」があるのかもしれない。

だからこそ、イエスは「わたしの言葉にとどまる（メイナン）」（8:31）ように、そして「わたしにつながって（メイナン）いなさい」（15:4）と語り掛けています。また、本日の箇所では、弟子のアンデレが「イエスのもとに泊まった（メイナン）」ことで、イエスがメシア（救い主）であることを見出しているのが分かります。共に寝泊まりするなかで相手の人となりや真意が徐々に見えてくるように、イエスの言動に「とどまって／つながって」（メイナン）いることで見えてくる真理、与ることのできる救いがあるということでもあるでしょう。

『あさかぜしずかにふきて』は、H.E.ストゥ作詞の賛美歌です。彼女は3人の息子を病や事故や戦争で次々に失いました。そんな不幸と悲しみに打ちのめされる彼女の心を支えるものは、もう祈り続けることしか残されていませんでした。そんなある朝、目が覚めた彼女は、「その果てを極めたと思っても、わたしはなお、あなたの中にいる」（詩篇 139:18）という聖書の言葉が本当のことであったと知るようになり、今までにない喜びと慰めに満たされていくこととなります。その時の思いが歌詞に込められています。主イエスの言葉にとどまり、つながって生きていくなかで見えてくる新しい命の世界が、神の国が、私たち一人ひとりにも備えられています。

（文責：望月達朗牧師）

